

3. 松尾頭地区の発掘調査報告

—妻木晩田遺跡第15次発掘調査(内容確認調査)—

1. 発掘調査の目的と経過

本調査は妻木晩田遺跡第15次発掘調査である。妻木晩田遺跡の全体像を把握することを目的とする第1期内容確認調査の4年次に位置づけられる。

鳥取県教育委員会では、平成14(2002)年度から妻木山地区の斜面地および谷部の調査を進めてきた(河合2003、濱田他2004、長尾2005)。これは、妻木晩田遺跡の全体像を把握するために、丘陵頂部だけではなく、斜面地や谷部の利用状況についても明らかにしようとするものである。

松尾頭地区では、これまでに第1次発掘調査、第7次発掘調査(内容確認調査)、第12次発掘調査(内容確認調査)において、丘陵頂部を中心に調査をおこなってきた。それに対して、本調査では松尾頭地区の斜面地の利用状況を明らかにするために調査地点を選定した。

今回の調査地点は、松尾頭3区の北西部に位置する。松尾頭1区と松尾頭3区の間には開析谷が東西に延びており、調査地点は松尾頭3区からこの谷に向かう斜面地にあたる(第2図、第6図)。

松尾頭3区北西部は、松尾頭地区の中でも遺構の密度が高く、隣接する本調査地点にも同時期の遺構が存在す

ることが予想された。そこで、松尾頭3区北西側の斜面地における遺構の広がりを確認するために3本のトレンチを設定した。調査期間は平成17(2005)年4月26日～9月27日、調査面積は112㎡である。

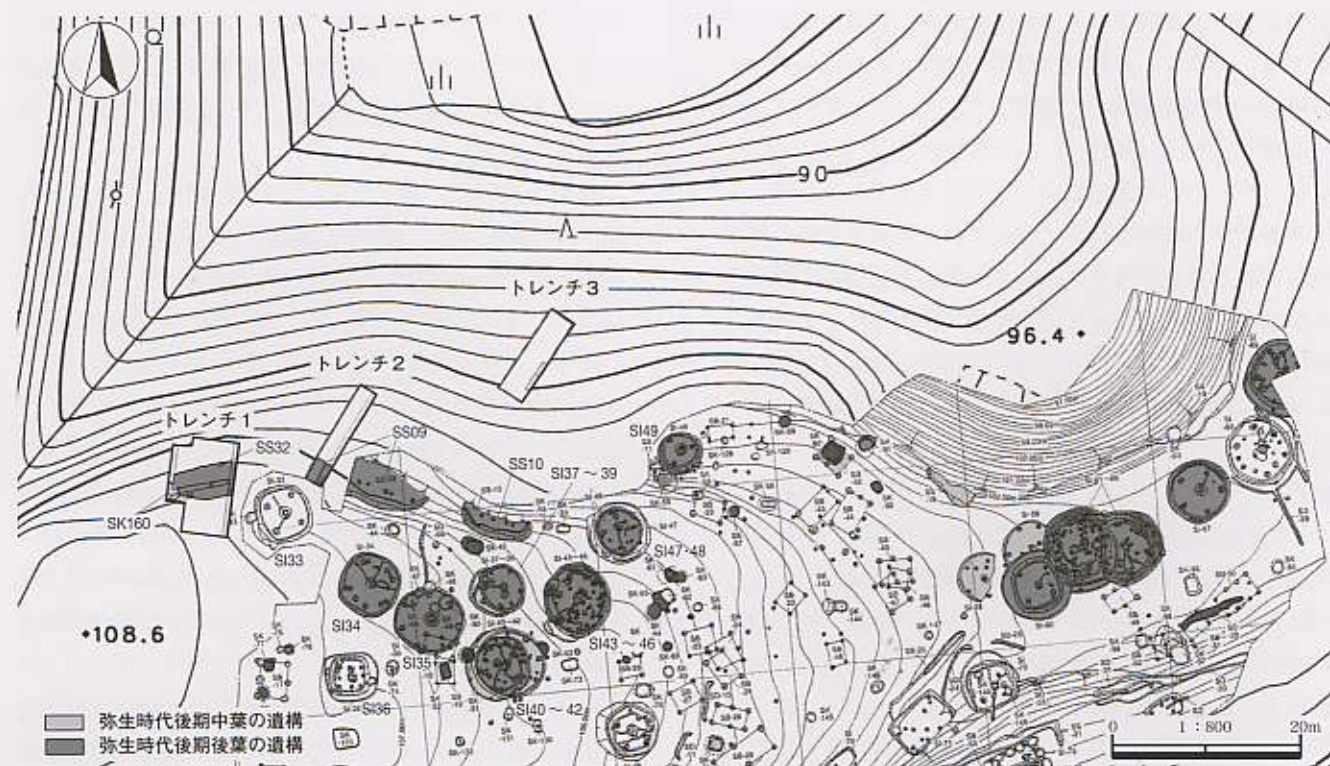
2. トレンチ1(T1)の調査(第7図～第15図)

第1次発掘調査時に松尾頭3区において確認されているSI33(松尾頭第33堅穴住居跡の略称。以下、特別に断らない限りは同様に略称を用いる。)～SI35、S140～S142と続く堅穴住居跡の配列が西方に連続するかどうかを確認するためにトレンチを設定した。

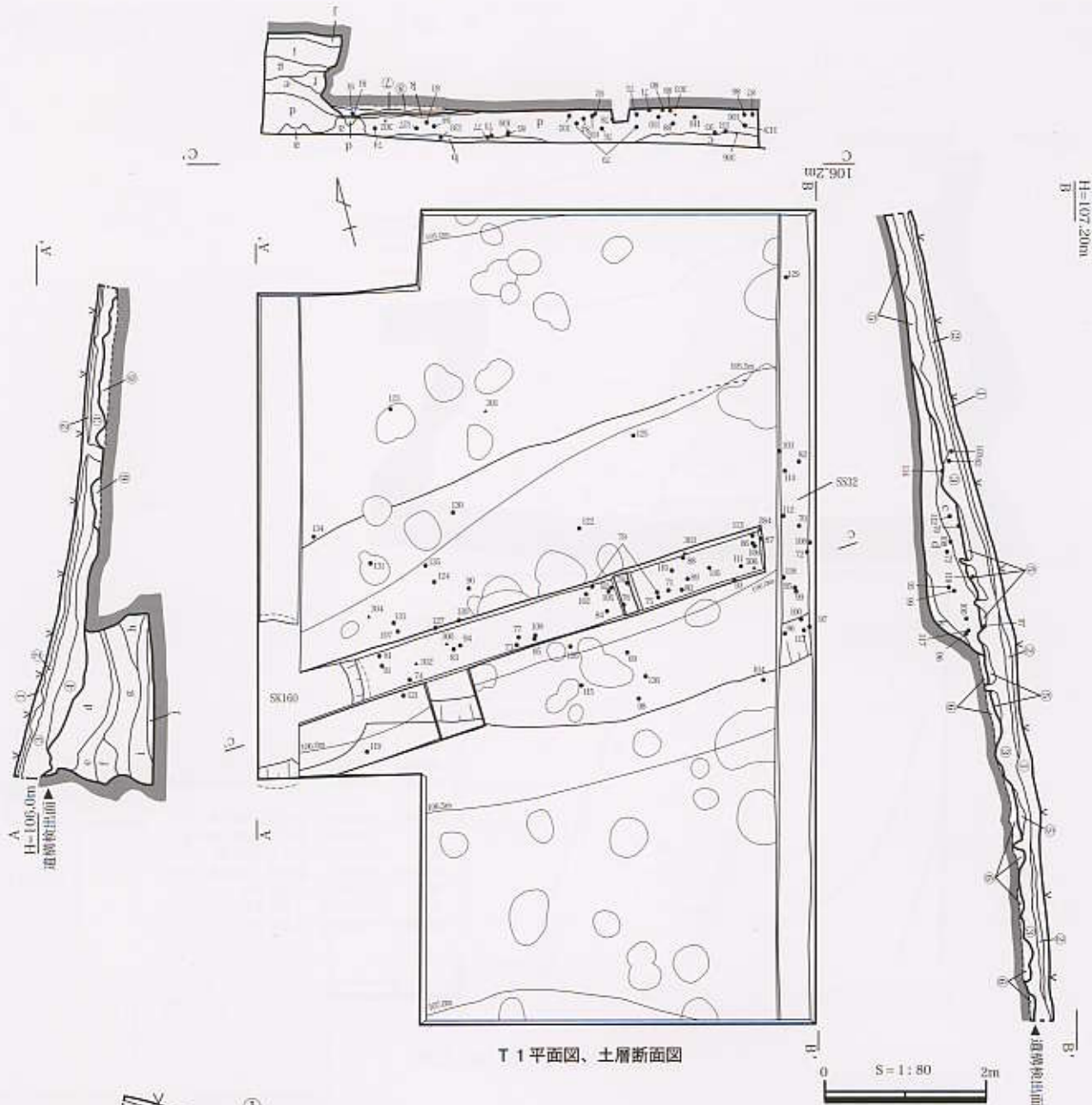
当初、5×10mの規模で調査をおこなったが、⑥層上面で東西に延びる遺構を検出したため、西側に2×6m拡張して精査した。その後、トレンチの東端と西端に南北方向にサブトレンチを設定し、第32段状遺構(SS32)と第160土坑(SK160)を確認した。また、SS32とSK160の長軸方向にサブトレンチを設定して、遺構の性格を調査した。

(1) トレンチ内の堆積

①層は表土で、調査区全体を約7～8cmの厚さで覆っている。その下にある②層(暗褐色土10YR3/3)から



第6図 15MG 調査区位置図

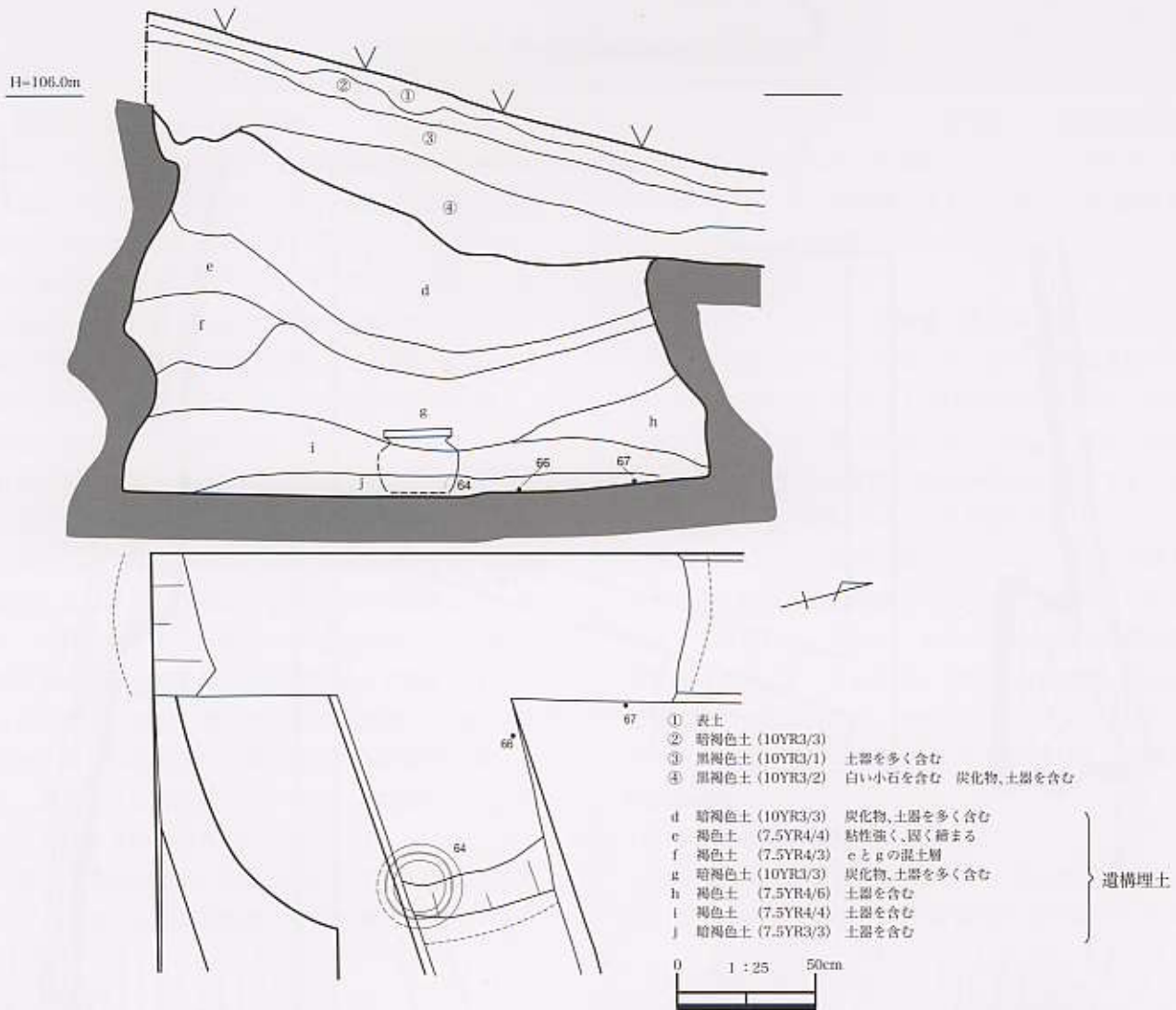


T 1 平面図、土層断面図



- 土器
 - 石器
 - ▲ 鉄器
- | | |
|-----------|-----------------------------|
| ① 表土 | |
| ② 暗褐色土 | (10YR3/3) |
| ③ 黒褐色土 | (10YR3/1) 土器を多く含む |
| ④ 黒褐色土 | (10YR3/2) 白い小石を含む 炭化物、土器を含む |
| ⑤ 灰黄褐色土 | (10YR4/2) 炭化物を若干含む、土器を多く含む |
| ⑥ 褐色土 | (7.5YR4/4) |
| ⑦ 褐色土 | (7.5YR4/4) 炭を若干含む |
| ⑧ 褐色土 | (10YR4/6) |
| a 黒褐色土 | (10YR3/2) |
| b 灰黄褐色土 | (10YR4/2) 土器、炭化物を若干含む |
| c におい黄褐色土 | (10YR4/3) 炭化物を含む |
| d 暗褐色土 | (10YR3/3) 炭化物、土器を多く含む |
| e 褐色土 | (7.5YR4/4) 粘性強く、固く締まる |
| f 褐色土 | (7.5YR4/3) eとgの混土层 |
| g 暗褐色土 | (10YR3/3) 炭化物、土器を多く含む |
| h 褐色土 | (7.5YR4/6) 土器を含む |
| i 褐色土 | (7.5YR4/4) 土器を含む |
| j 暗褐色土 | (7.5YR3/3) 土器を含む |
| k 褐色土 | (7.5YR4/3) |
- } 遺構埋土

第7図 15MG トレンチ 1



第8図 15MG 第160土坑

は、土器の破片が出土しているが、時期を決めることができる口縁部等は出土していない。③層（黒褐色土 10YR3/1）からは、IV～VI期の土器が出土しており（119～136、以下数字のみは遺物番号を表す）、弥生時代終末期以降の堆積であると考えられる。③層は調査区全体に広がっているが、④層（黒褐色土 10YR3/2）、⑤層（灰黄褐色土 10YR4/2）はそれぞれ西側、東側の一部に分布が偏っている。④層からはV～VI期の土器が出土しており（137～140）、弥生時代終末期以降の堆積ということがわかるが、⑤層は遺物の密度が疎であるうえ、時期の特定できるものは含まれなかった。⑥層（褐色土 7.5YR4/4）は無遺物層であり、⑥層上面がSK160とSS32の遺構検出面である⁽¹⁾。

(2) 遺構

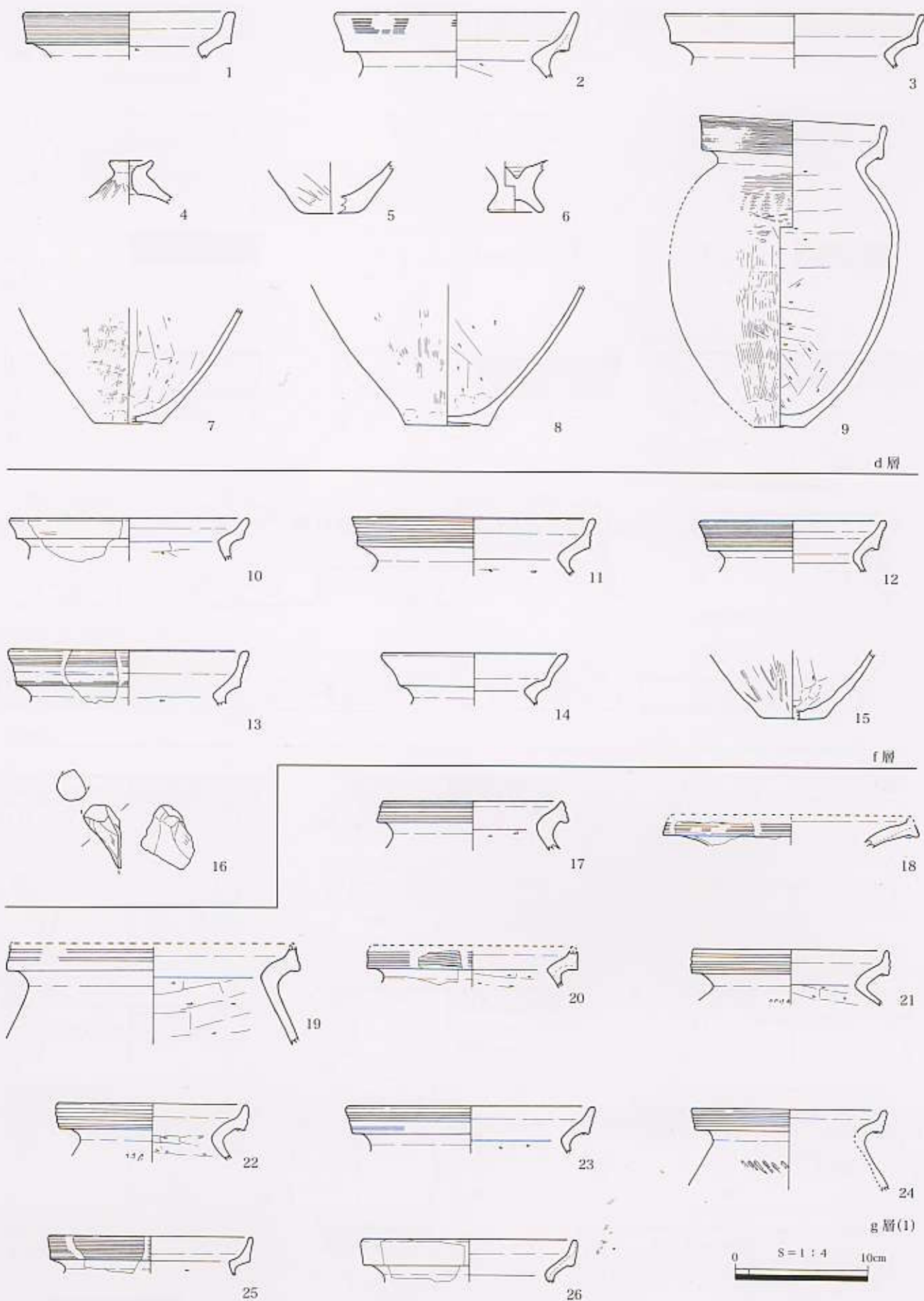
第160土坑 (SK160)

丘陵頂部から北側斜面にかけての傾斜変換点（標高約106 m）付近に位置する。平面形態は検出面、底面ともに円形、断面形態は袋状を呈する。規模は、検出面で直径1.92 m、底面で直径2.10 m、深さは最大1.25 mである。

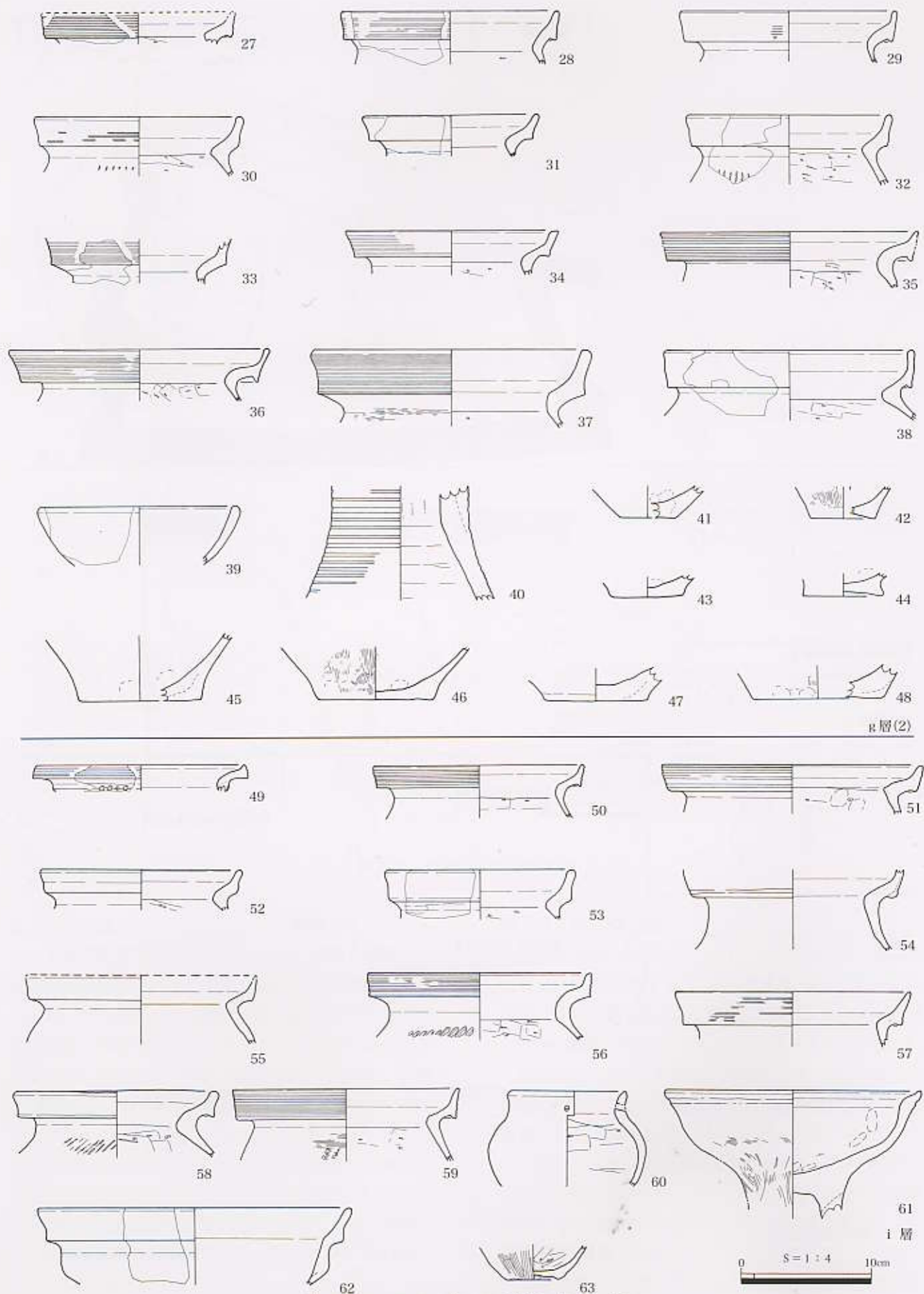
底面付近（j層）からV-2期の土器（64～67）が出土していることから弥生時代後期中葉以前に掘られた遺構であると判断できる。また、f～i層からはV-1～3期（10～63）、最上層のd層からはV-3～VI期（1～9）の遺物が出土しており、この土坑は弥生時代後期中葉から終末期にかけて埋没したと判断できる。

第32段状遺構 (SS32)

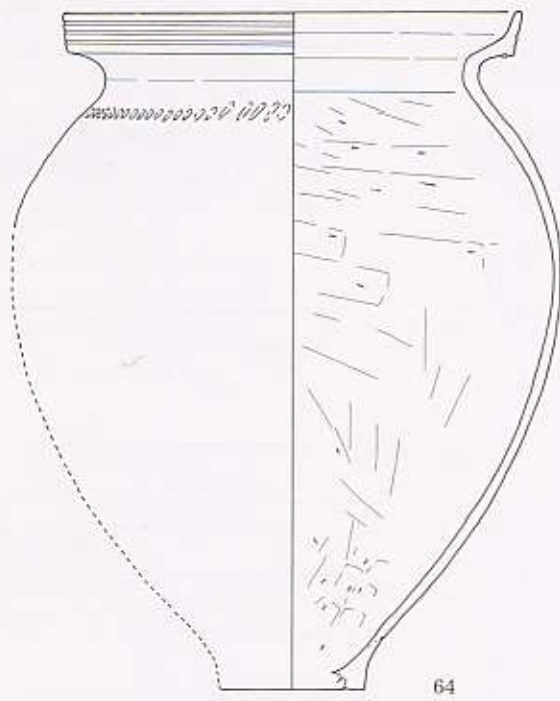
丘陵頂部から北側斜面にかけての傾斜変換点（標高約107 m）に沿うように東西に延びる。長軸の規模は不明



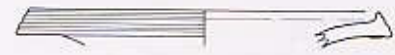
第9図 15MG 第160土坑出土遺物(1)



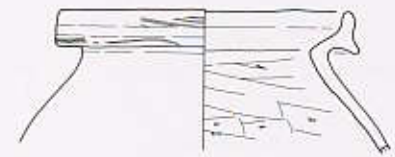
第10図 15MG 第160土坑出土遺物(2)



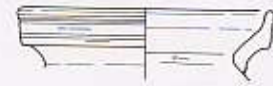
64



65

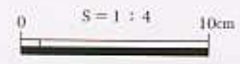


66

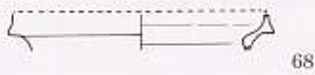


67

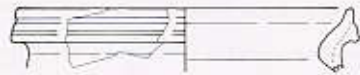
J層



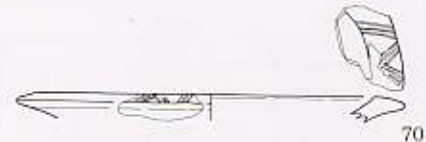
第11図 15MG 第160土坑出土遺物(3)



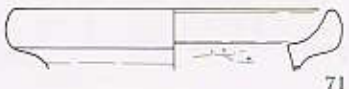
68



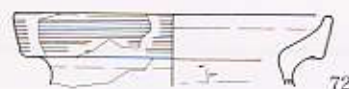
69



70



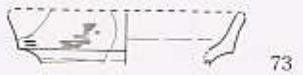
71



72



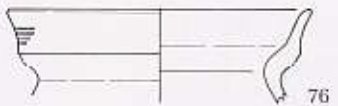
75



73



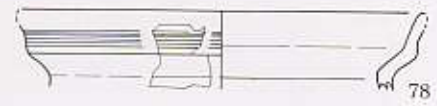
74



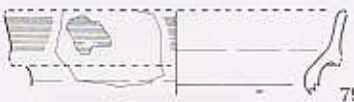
76



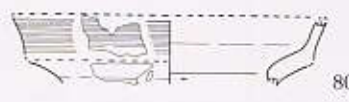
77



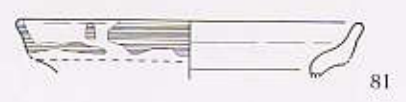
78



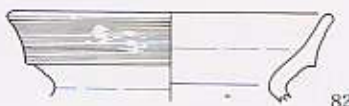
79



80



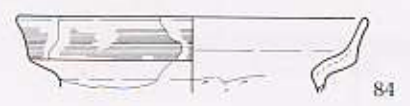
81



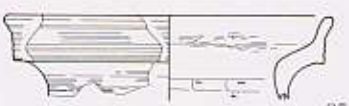
82



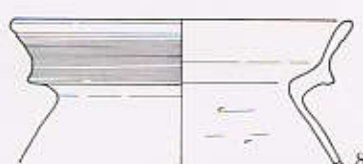
83



84



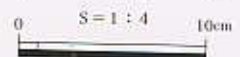
85



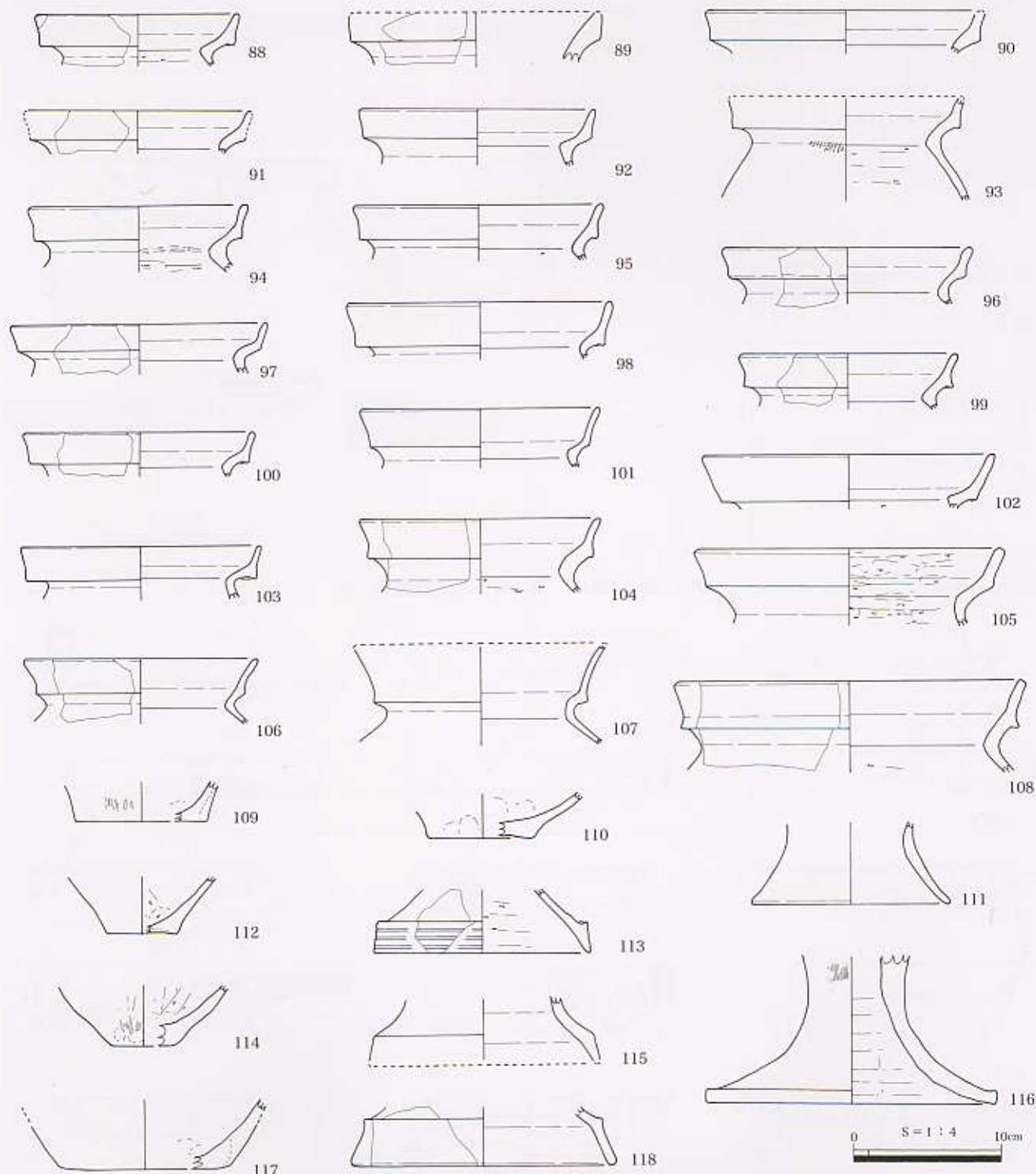
86



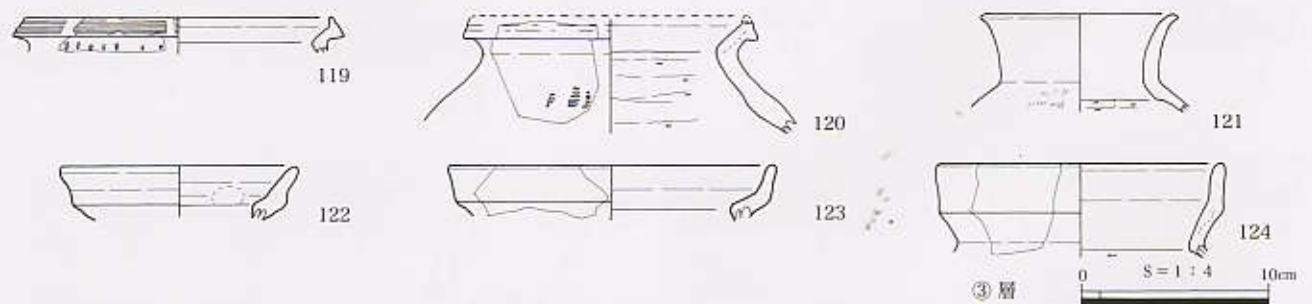
87



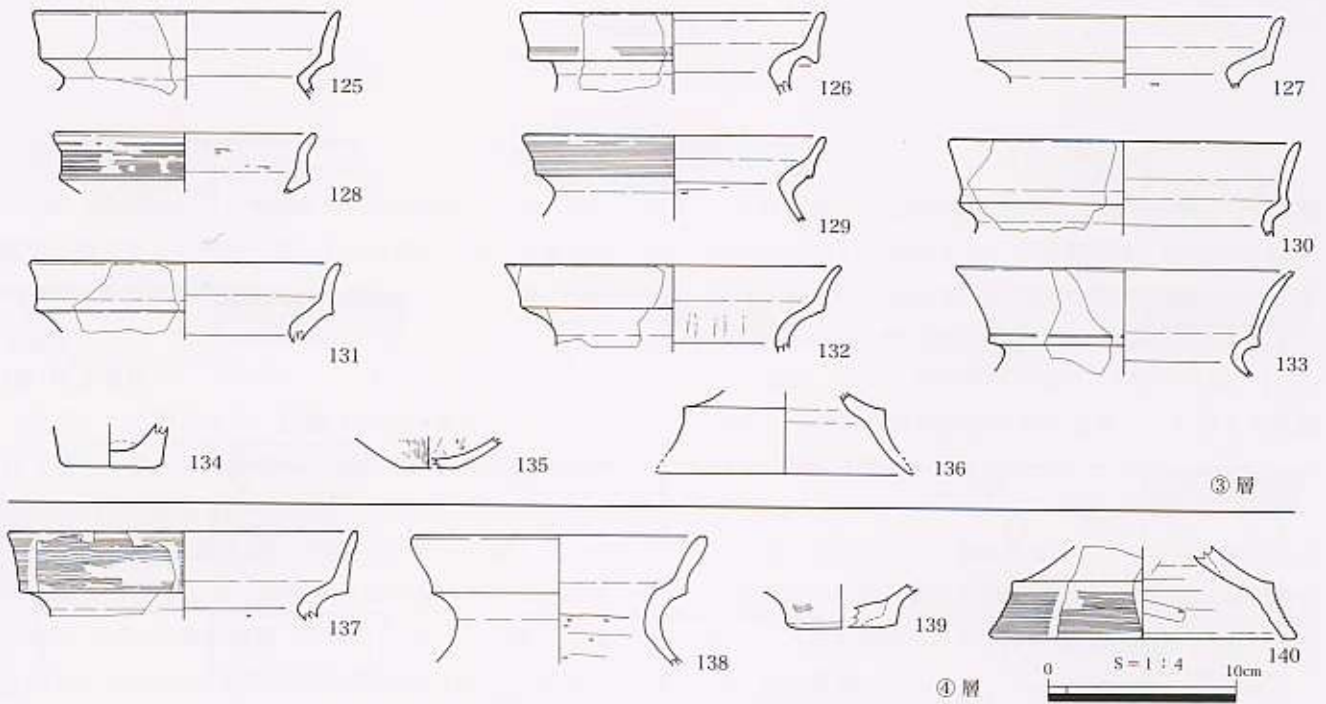
第12図 15MG 第32段状遺構出土遺物(1)



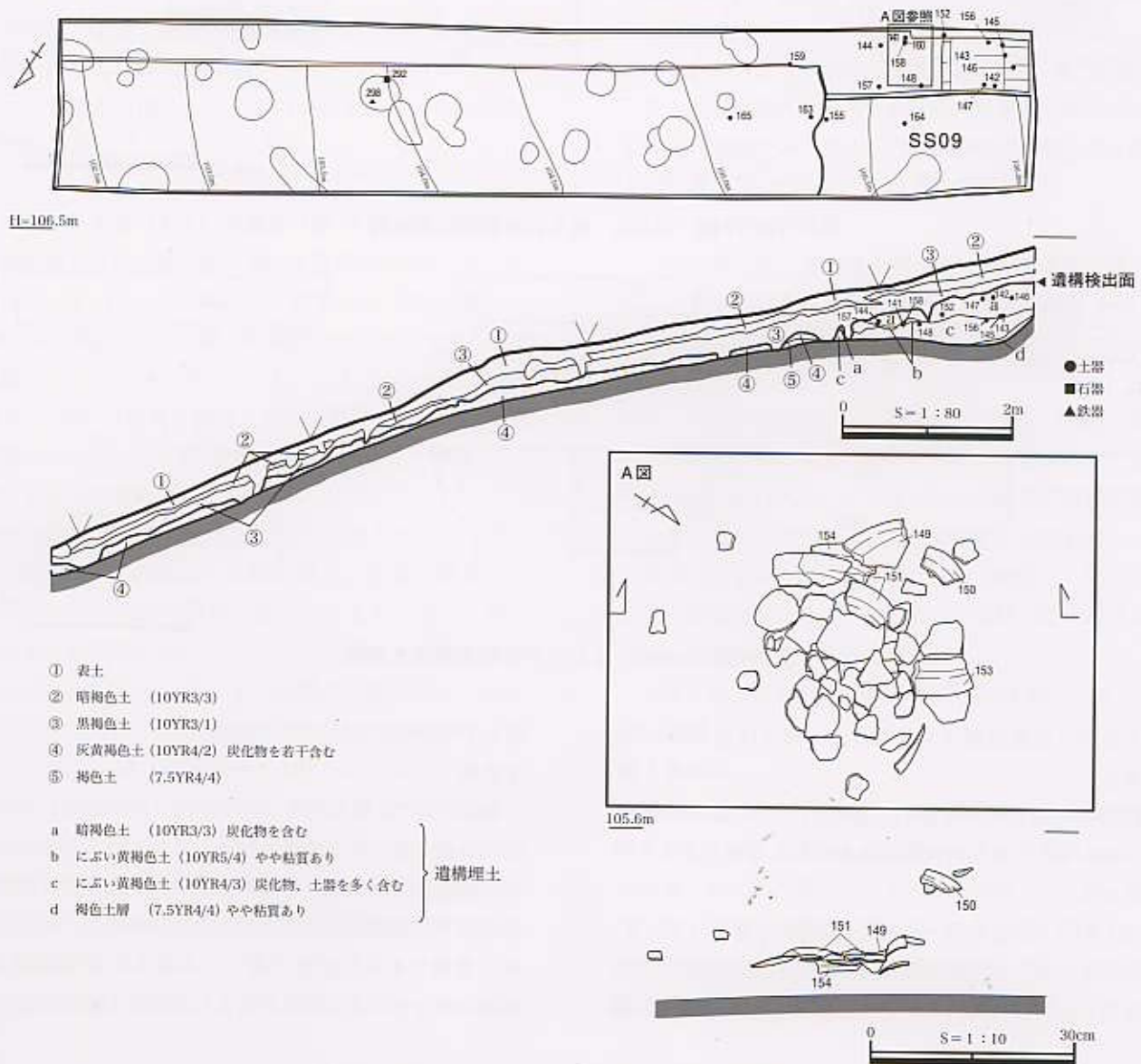
第13図 15MG 第32段状遺構出土遺物(2)



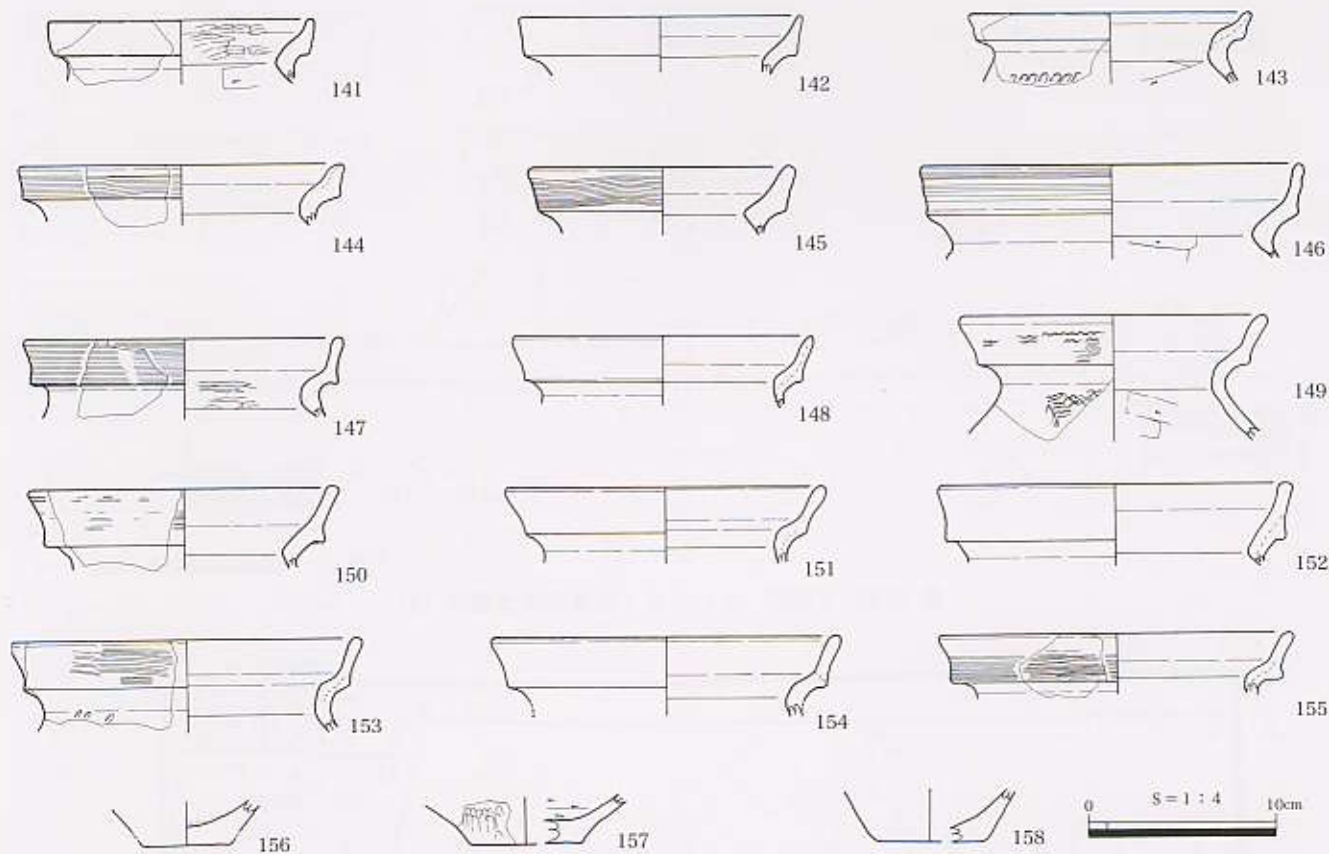
第14図 15MG トレンチ1包含層出土遺物(1)



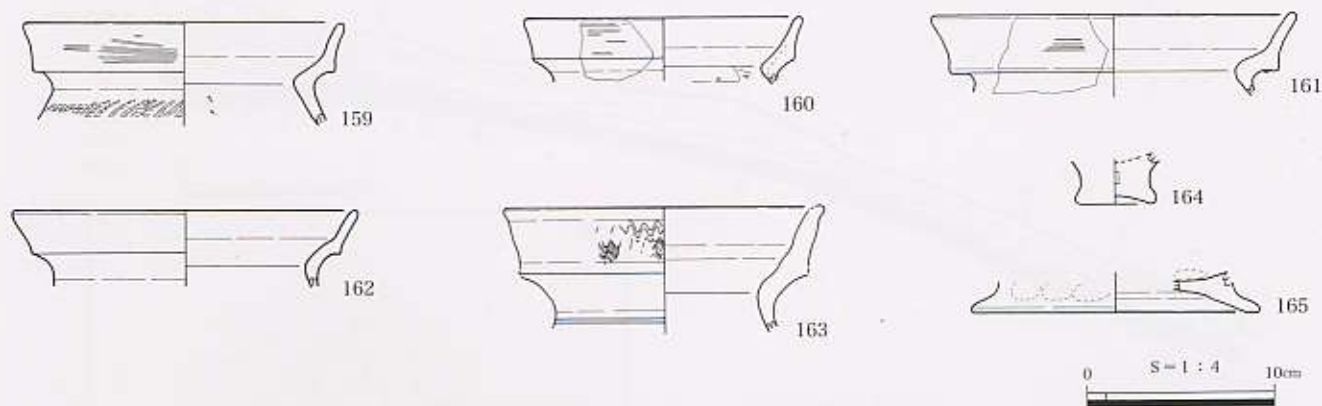
第15図 15MG トレンチ1包含層出土遺物(2)



第16図 15MG トレンチ2平面図・断面図



第17図 15MG 第9段状遺構出土遺物



第18図 15MG トレンチ2 包含層出土遺物

であるが、短軸は最大で約3.5m、深さは最大約60cmを測る。

底面付近からV-3期の土器が出土しており(80~82・86・87)、弥生時代後期後葉以前の遺構であると判断できる。

SK160とSS32は同一の埋土(d層)で覆われている。このことから、SK160が最終的に埋没した時期とSS32が埋没した時期は同時期であると考えられ、切り合い関

係も不明瞭である。

その他

調査区内で、黒褐色土(10YR3/1、10YR3/2)のピット状の掘り込みを多数検出した。これらは、松尾頭4区でも確認されたピットと類似しており、松尾頭4区の概要報告に記載されているとおり、弥生時代より新しい時期の遺構である可能性が高い(本書9頁参照)。また、植物の根などによる攪乱が含まれることも想定され、す

べてが人為的なピットではない可能性がある。明らかに植物の根であると判断できたものは除いたが、明確に植物の根であると判断できないものについては、第7図に示した。

(2) 出土遺物

前述した土器のほか、石鏃(292)、磨石(284)、台石(286)、敲石(288・289)、緑色凝灰岩の剥片(293・295・296)、鉄器(299～306)が出土した。

緑色凝灰岩の剥片は、③層、SS32のd層、SK160のd層から出土した。松尾頭4区の第97竪穴住居跡(SI97)や第47溝状遺構(SD47)で出土した管玉(第5図2・3)には、同様の緑色凝灰岩が石材として利用されていることから、これらの剥片は玉作関連資料であると考えられる。

鉄器は、③層、SS32のd層から出土した。錆ぶくれが激しいために個々の器種は不明瞭であるが、鉄斧や小型の工具類の可能性のあるものが含まれている(299・301～304)。

3. トレンチ2(T2)の調査(第16図～第18図)

松尾頭3区の北側斜面における遺構分布を明らかにするため、2×10mのトレンチを設定した(第16図)。

T2の隣接地には、第1次発掘調査において第9段状遺構(SS09)が検出されている。T2でもトレンチの南端で、SS09の続きを確認したが、遺構の立ち上がりを確認できなかったため、南側に1.5m拡張して精査した。

(1) トレンチ内の堆積

T2の設定範囲は笹で覆われていたため、表土である①層は約5～20cmと比較的厚い。②層(暗褐色土10YR3/3)からは少量の土器が出土しているが、細片であるため時期を決定することはできない。③層(黒褐色土10YR3/1)からは、V～VI期の土器(159～165)が出土しており、弥生時代終末期以降の堆積であると考えられる。④層(灰黄褐色土10YR4/2)からは、炭化物が若干出土しているものの、時期を特定できるような土器は出土しなかった。⑤層(褐色土7.5YR4/4)は無遺物層である。黒褐色埋土のピットは④層上面が遺構検出面であり、第9段状遺構は⑤層上面が遺構検出面である。

(2) 遺構

第9段状遺構(SS09)

丘陵頂部から北側斜面にかけての傾斜変換点付近(標高105.5m)に位置する。平面規模は、南北約2.4m、深さは最大約70cmを測り、南側の壁際に幅約80cm、深さ約5cmの浅い溝が掘られている。底面付近から出土した土器は、V～3期のものであり(149～151、153・154)、弥生時代後期後葉以前の遺構とした第1次発掘調査の調査成果と一致する。

その他

④層上面において、黒褐色埋土のピット状の掘り込みを多数検出した。T1と同様に、これらの中には植物の根による攪乱が含まれている可能性がある。

(3) 出土遺物

前述した土器のほか、③層からは石鏃(291)、鉈の先端と思われる鉄器片(297)が出土した。

4. トレンチ3(T3)の調査(第19図～第22図)

第1次発掘調査で検出された竪穴住居跡が密に分布する区域(SI33～47周辺)の北側斜面の遺構分布を確認するため、3×10mのトレンチを設定した。

(1) トレンチ内の堆積

①層は表土で、調査区全体を約10cmの厚さで覆っている。その下にある②層(暗褐色土10YR3/3)からは、土器の破片がまばらに出土するが、時期を決定できるものは出土していない。③層(黒褐色土10YR3/1)からはV～VI期の土器が出土しており(166～189)、弥生時代終末期以降に堆積した層であると考えられる。④層(灰黄褐色土10YR4/2)からは、IV～VI期の土器が出土しており(190～280)、弥生時代中期から終末期にかけて堆積したものと考えられる。⑤層(褐色土7.5YR4/4)以下は無遺物層である。⑧～⑩層で堆積の乱れが見られるが、風倒木によるものと判断した。

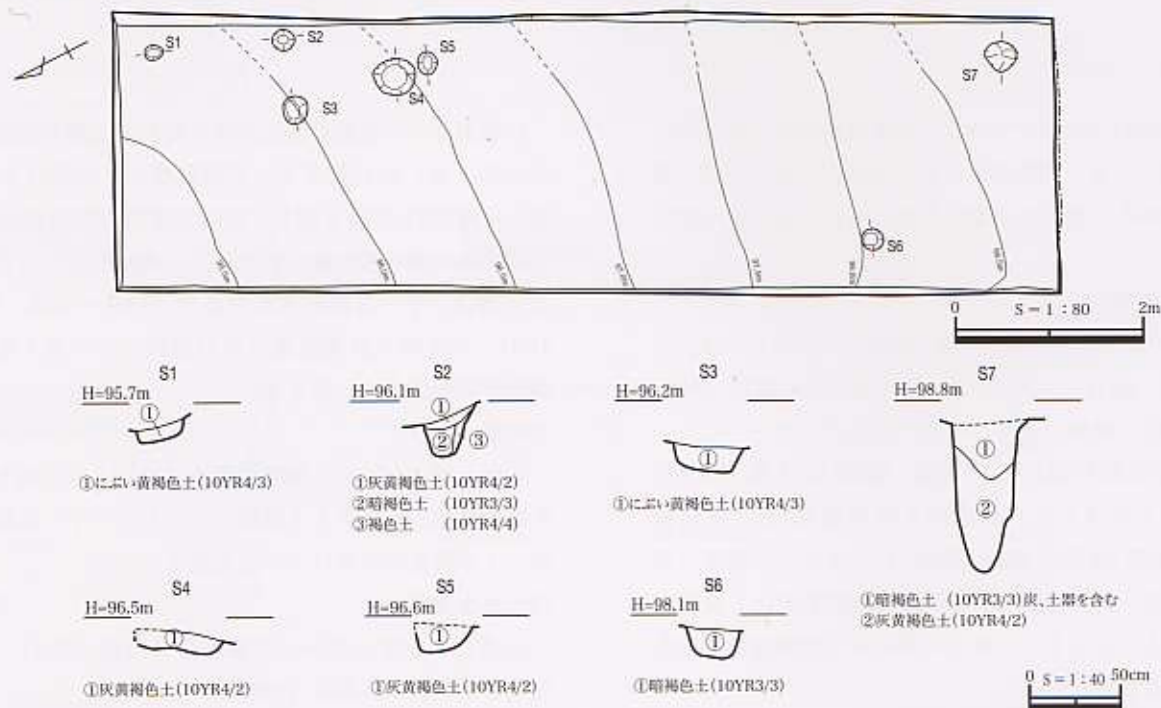
④層上面と⑤層上面において、遺構面を検出している。

(2) 遺構

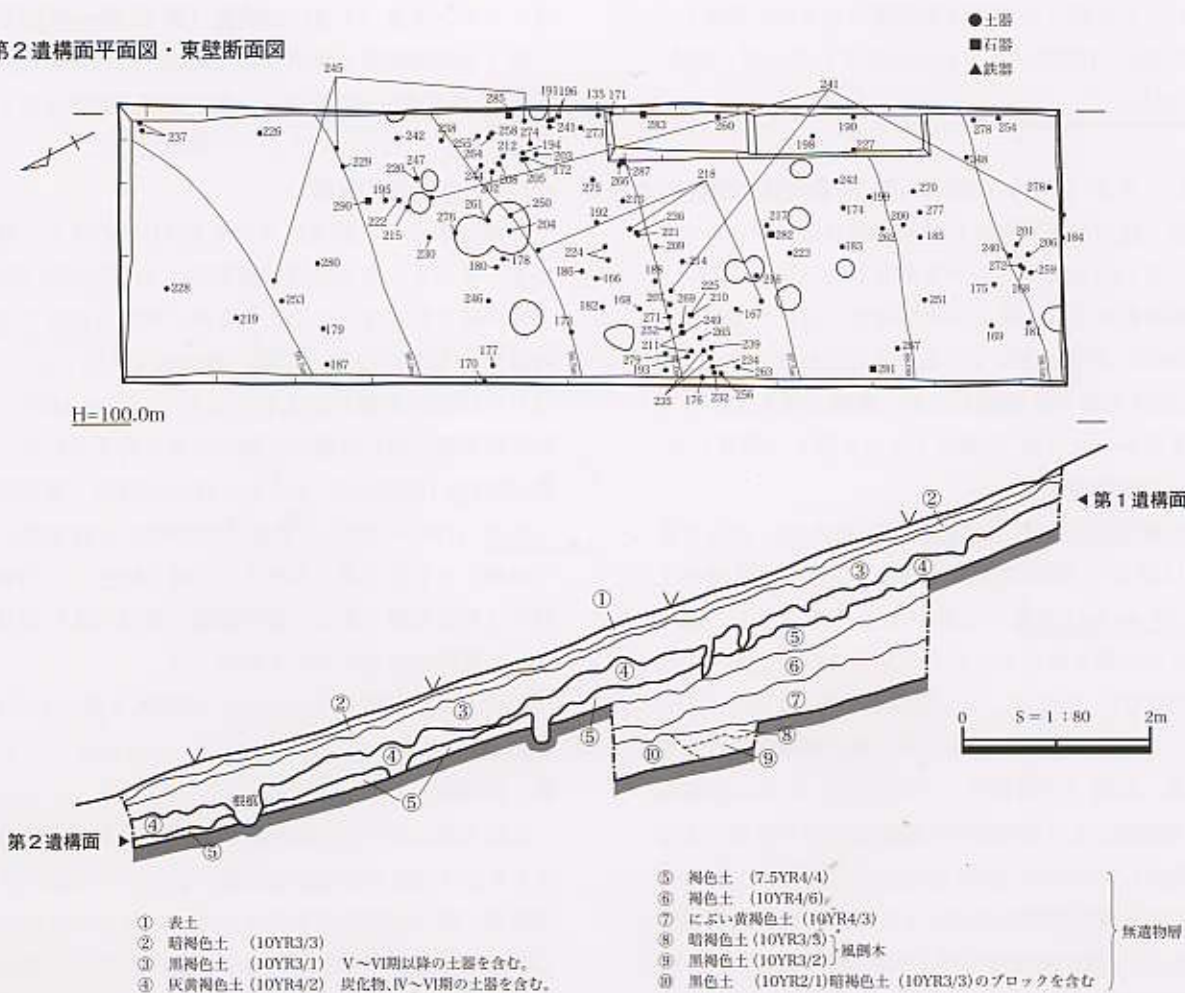
第1遺構面

④層上面において、ピット状の掘り込みを多数検出したため、すべてを半裁して遺構かどうかを確認した。その結果、埋土が黒褐色を呈するもののほとんどは、途中で分岐したり、木の根が残っていたりしていたため、植物の根痕であると判断した。そのため、それらの根痕を除外し、7基のピットを抽出した。

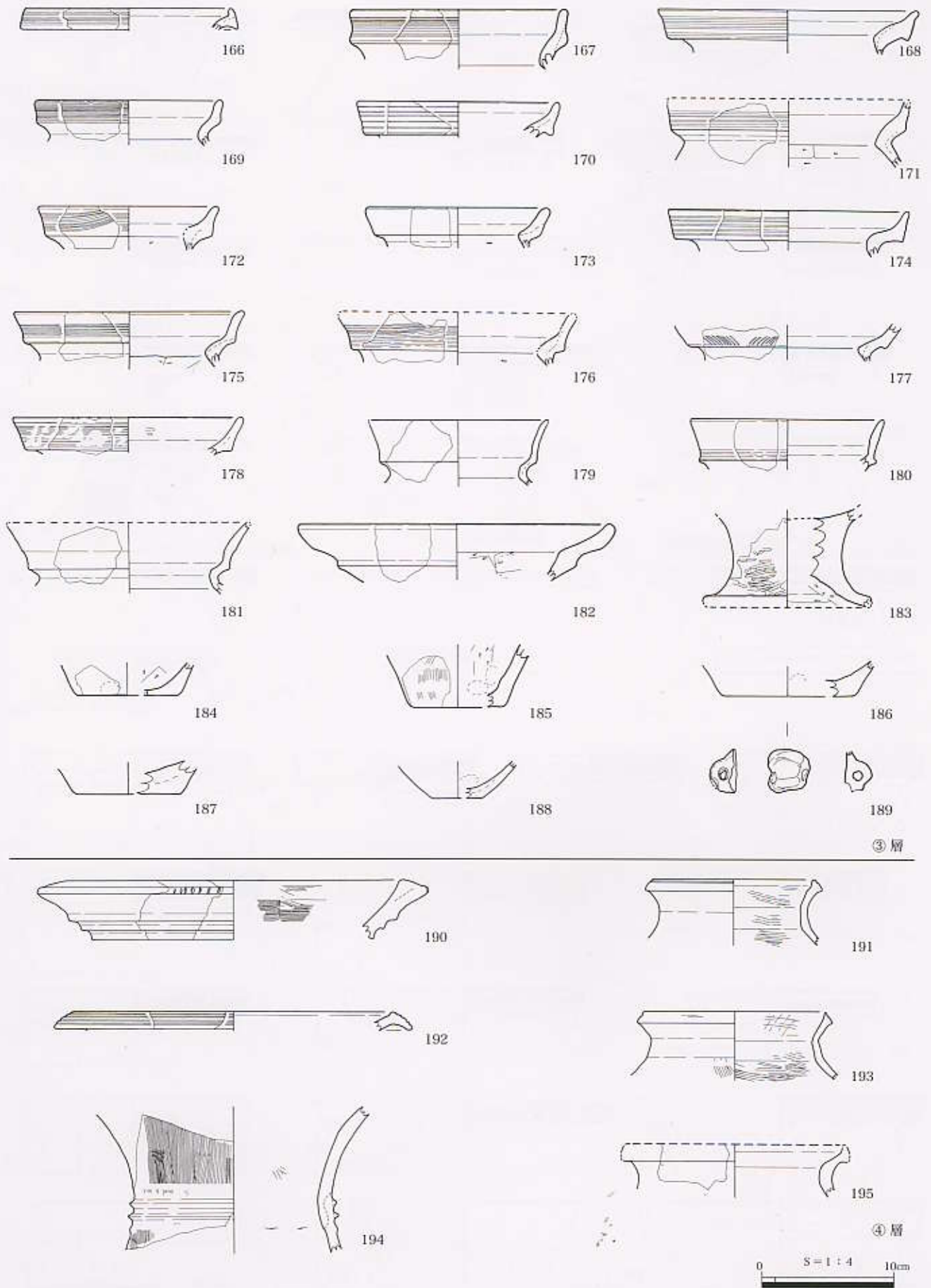
第1遺構面平面図・遺構断面図



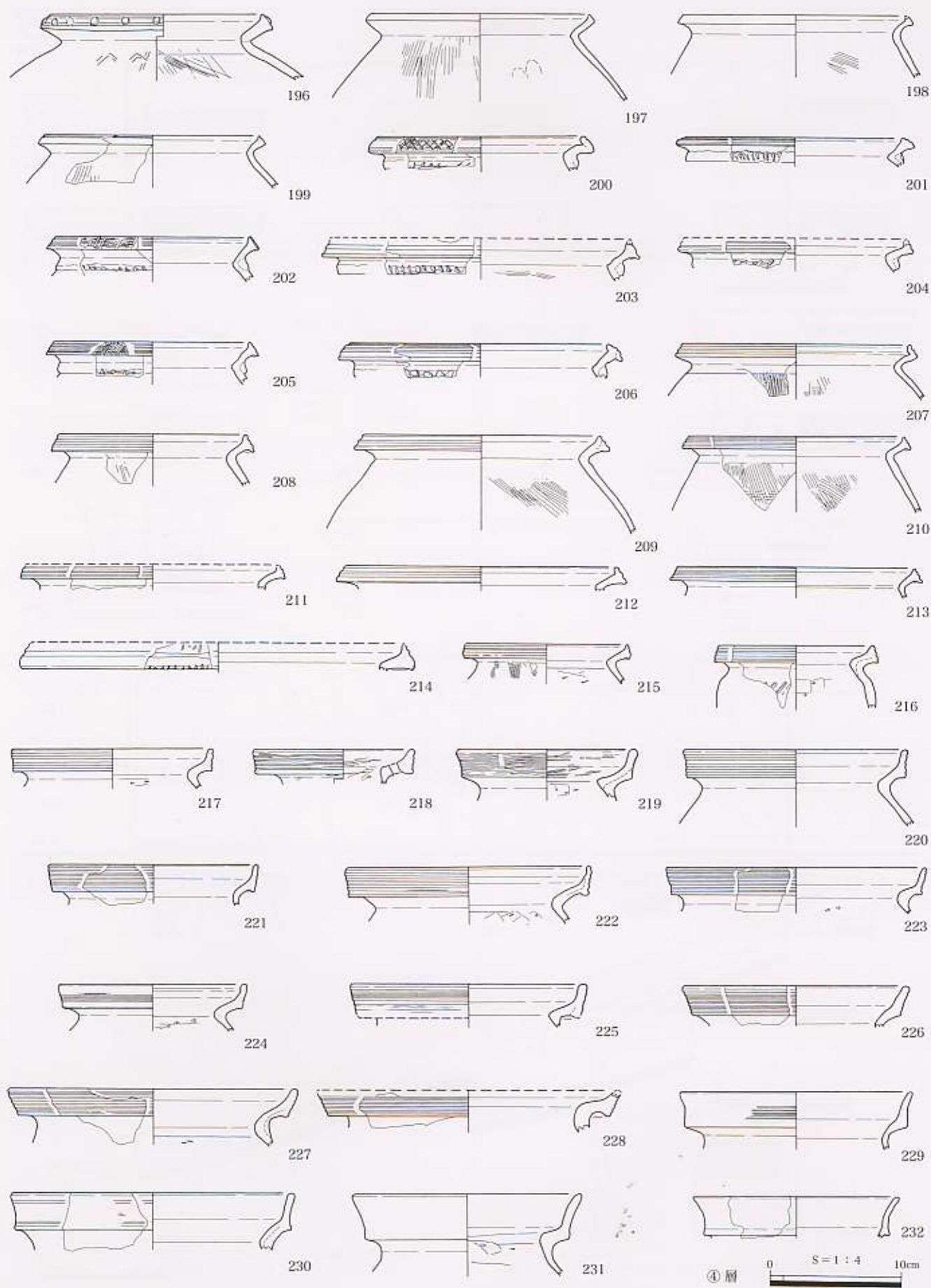
第2遺構面平面図・東壁断面図



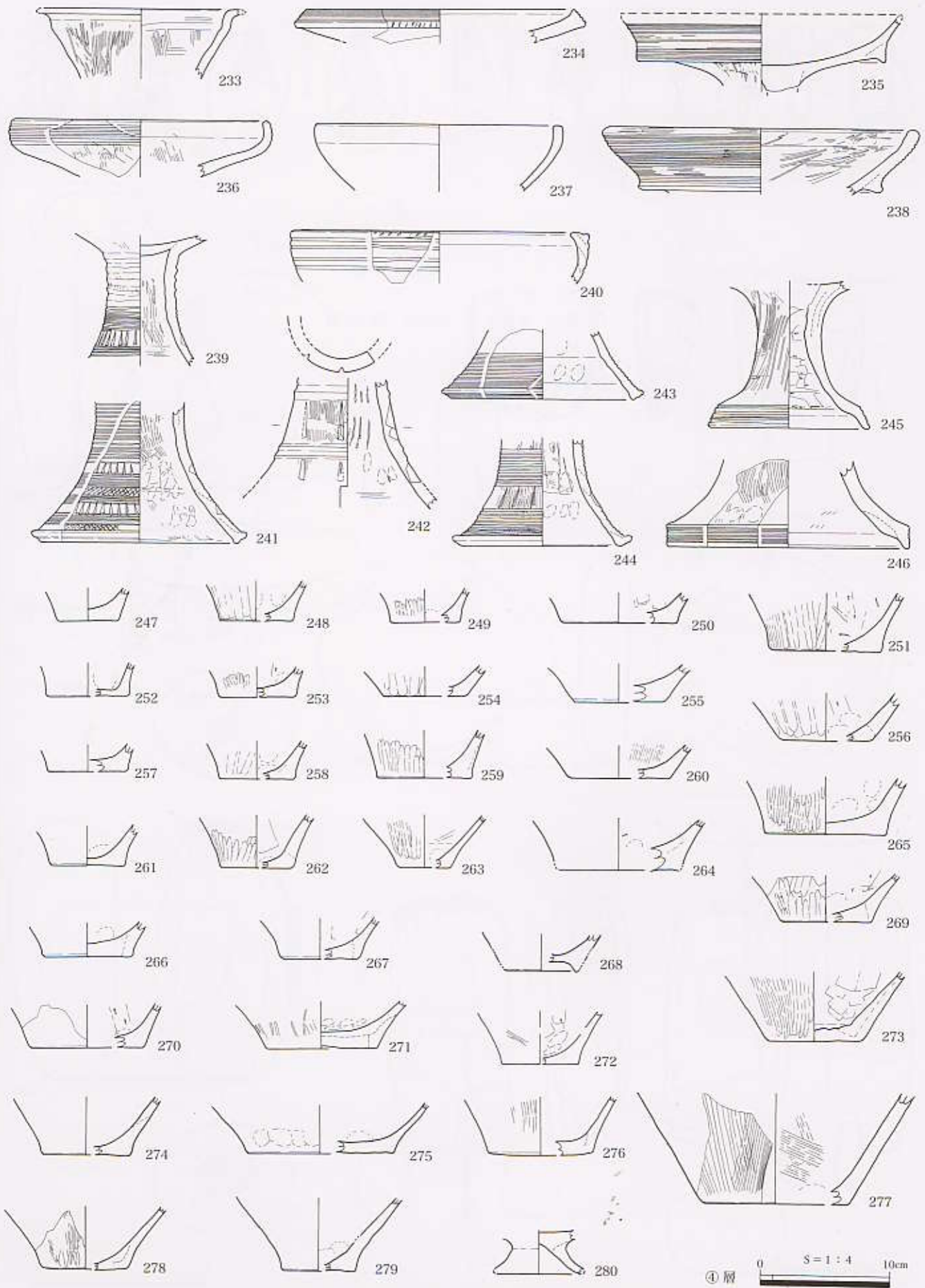
第19図 15MG トレンチ3



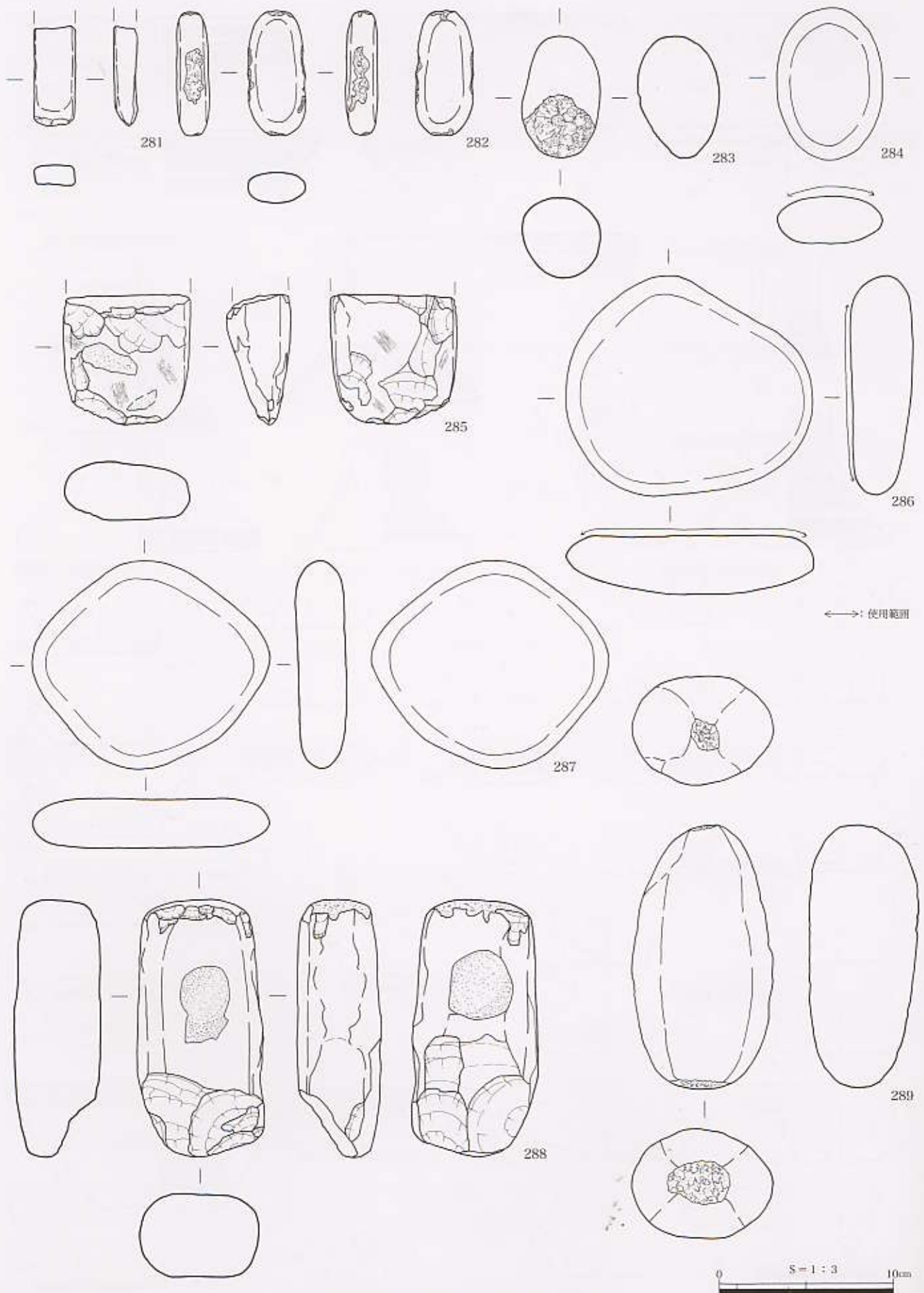
第20図 15MG トレンチ3 包含層出土遺物(1)



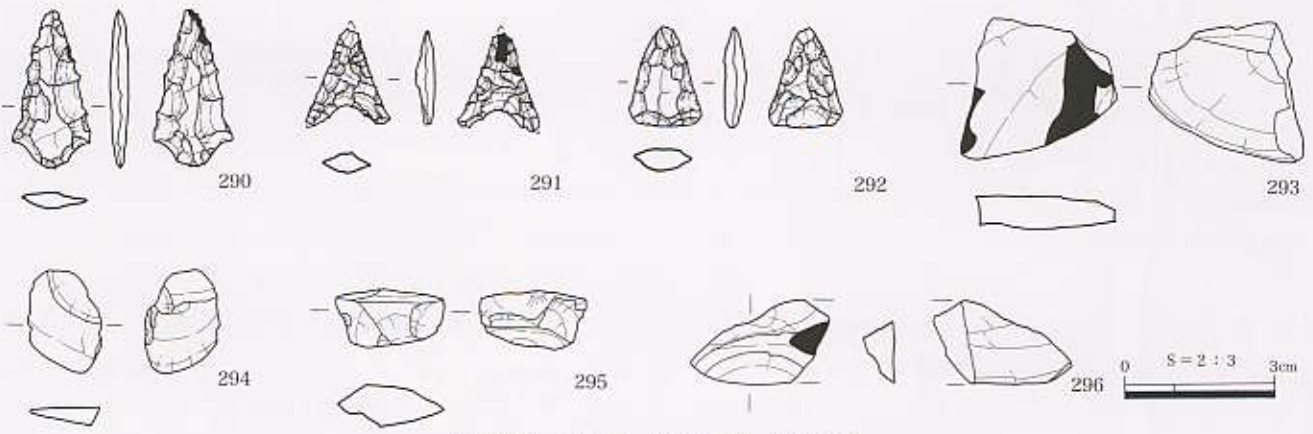
第 21 図 15MG トレンチ 3 包含層出土遺物 (2)



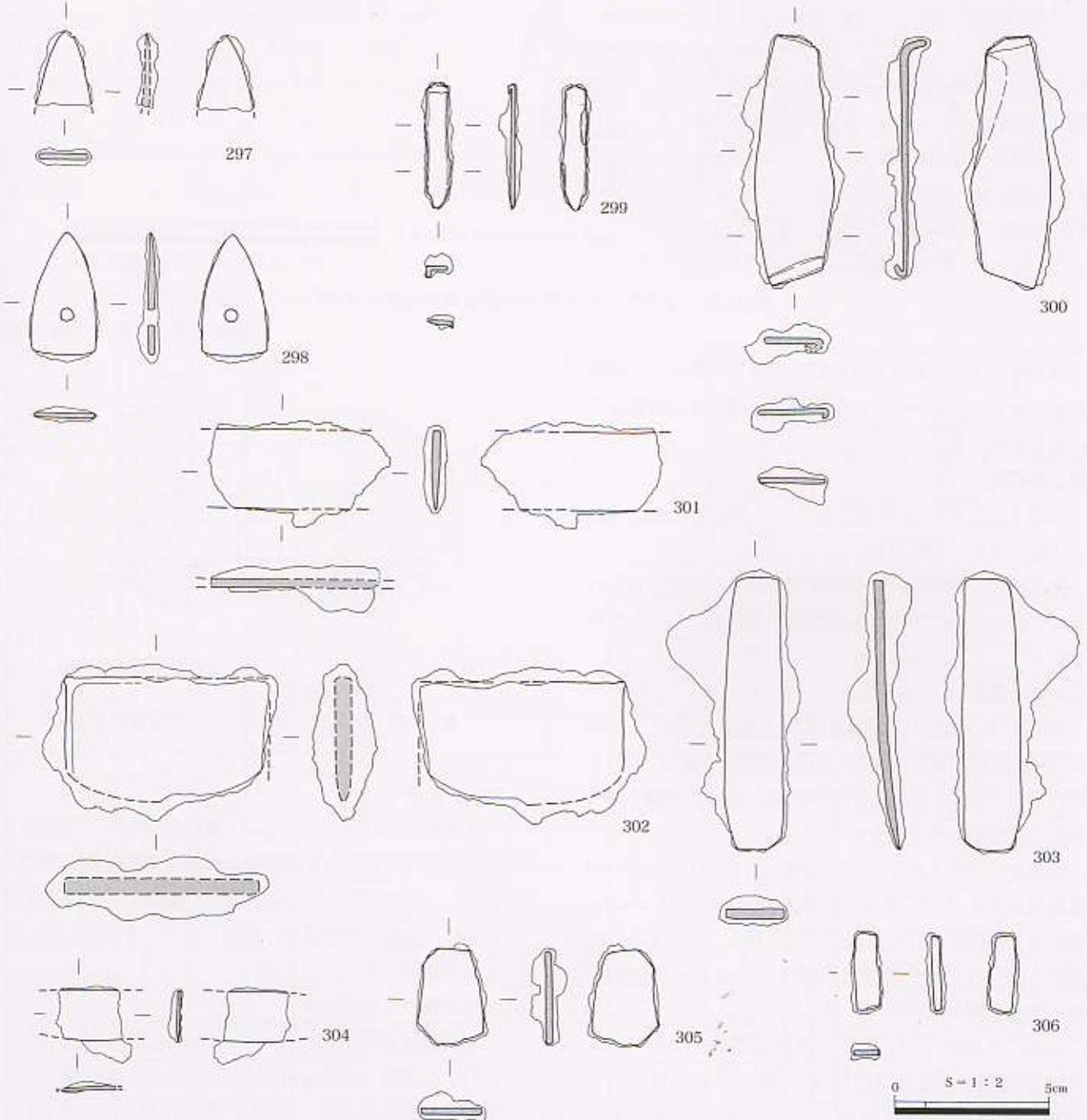
第22図 15MG トレンチ3 包含層出土遺物 (3)



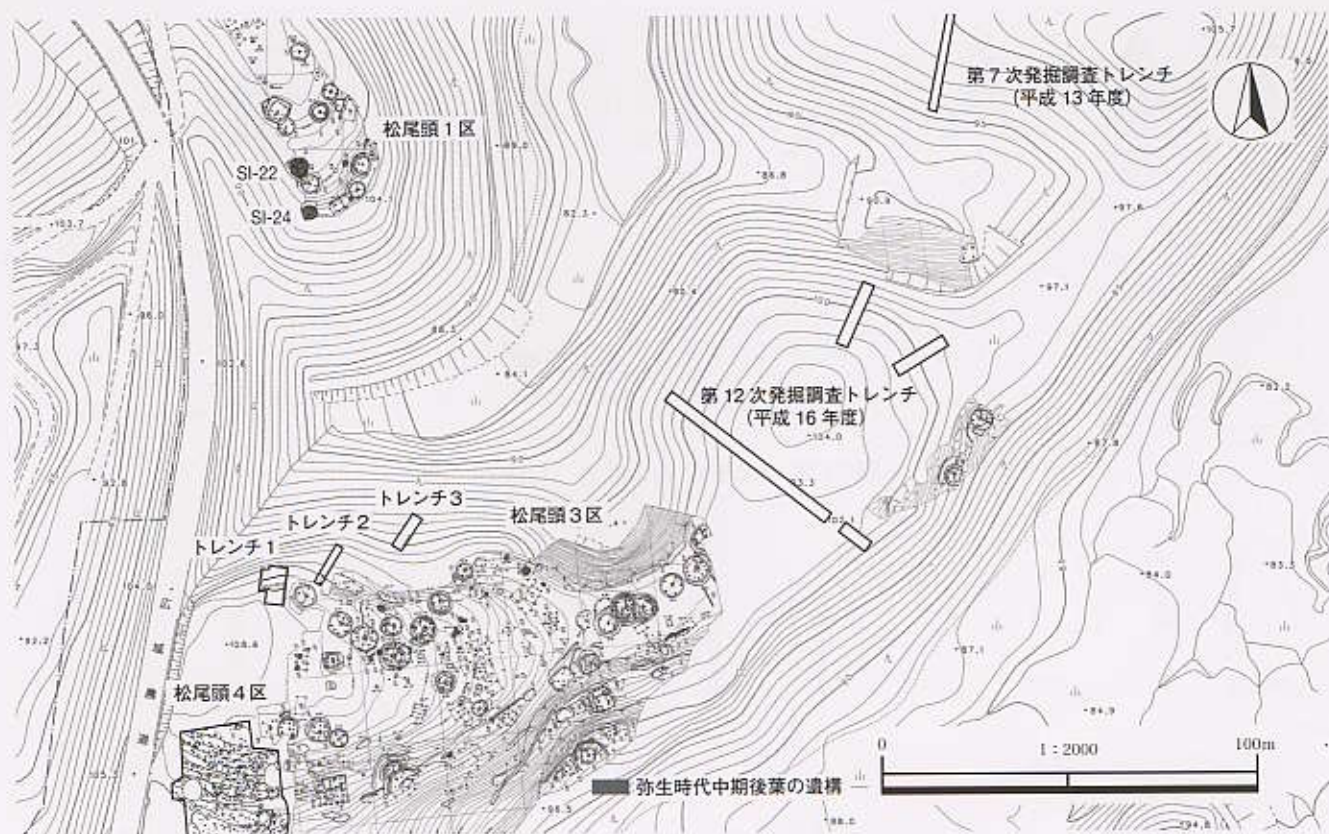
第23図 15MG 出土遺物 (石器①)



第24図 15MG 出土遺物(石器②)



第25図 15MG 出土遺物(鉄器)



第26図 松尾地区弥生時代中期後葉の遺構分布図

弥生時代中期後葉から終末期に堆積した④層上に遺構面が存在することから、弥生時代終末期以降の遺構面であると判断できる。

第2遺構面

⑤層上面において15基のピットを検出したが、これらは検出のみにとどめた。

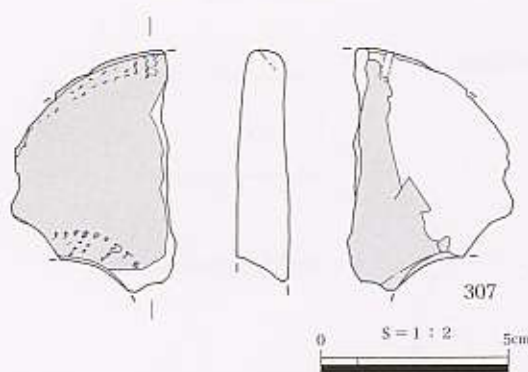
弥生時代中期後葉から終末期に堆積した④層に覆われることから、弥生時代終末期以前の遺構面であると判断できる。

(3) 出土遺物

前述した土器のほか、分銅形土製品(307)、石鏃(290)、石斧未製品(285)、台石(287)、砥石(281)、敲石(282・283)、緑色凝灰岩製の剥片(294)、鉄鏃(298)が③・④層から出土した。

④層から出土した分銅形土製品(307)は、表面の周縁部を巡るように二枚貝の腹縁で施文されるとともに、端部から裏面に向けて斜めに穿孔される。このような分銅形土製品は、大山町塚田遺跡などで出土しているが、妻木晩田遺跡からは初めて出土した。

なお、④層からは、IV期の土器が多数出土している(190～194、196～210)。松尾頭3区北西部にはIV期の土坑が密に分布しており(第26図)、これらの土器は丘陵頂部からの流れ込みであると想定される。



第27図 15MG トレンチ3包含層出土遺物

5. まとめ

本調査の主たる調査課題は、遺構密度が高い松尾頭3区北西部に位置する北側斜面における遺構分布の確認であった。3本のトレンチを設定して調査した結果、1基の土坑、2基の段状遺構、多数のピットを検出した。以下、本調査のまとめとする。

(1) 遺構の分布状況

本調査区周辺では、V-3期の段状遺構が、東からSS10、SS09、SS32と丘陵縁辺部から北側斜面にかけての傾斜変換点付近に連続して築かれたことが明らかとなった。また、SS10、SS09の南側には、竪穴住居が密

に分布しており、このことは本調査区周辺の土地利用を考える上で重要である。本調査区周辺において段状遺構の丘陵側に竪穴住居が築かれたと仮定すると、SS32の南側には竪穴住居跡が分布する可能性は高い。

(2) 今後の課題

T3の④層中からIV期の土器が多数出土した。T3が位置する開析谷を挟んで、松尾頭1区南部と松尾頭3区北西部には、弥生時代中期後葉の遺構が比較的密に分布している(第26図)。このように、本調査区周辺は集落の開始時期の様相を明らかにするうえで、重要なエリアであると認識される。

また、松尾頭地区内には、玉作関連遺構(SI31)が見られるとともに、鉄斧や鉋などの鉄製工具が多数見られる。本調査においても、各トレンチから玉作関連資料や小型工具類と考えられる鉄器が認められた。今後、このような資料の調査を進め、生産活動を明らかにするこ

とも、妻木晩田遺跡の全体像を解明するために重要な課題である。(河合章行・長尾かおり)

【註】

- (1) SS32の遺構検出面は⑥層上面であるが、北東側で掘り足りない部分があり、検出ラインが不明瞭である。

【参考文献】

- 河合章行 2003 「妻木山地区谷部の内容確認調査報告—妻木晩田遺跡第9次調査—」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会
 濱田竜彦・河合章行・赤井和代 2004 「妻木山地区谷部の発掘調査報告—妻木晩田遺跡第10次発掘調査—」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2003』濱田竜彦・馬路晃祥編、鳥取県教育委員会
 長尾かおり 2005 「妻木山地区の発掘調査報告—妻木晩田遺跡第14次発掘調査(内容確認調査)—」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2004』岡野雅則編、鳥取県教育委員会

第3表 15MG土器観察表

排 図 号	番 号	出 土 位 置	層 位	器 種	法量 (cm)			色 調		調 整		残存部位 残存率	胎 土 成	備 考
					口 径	底径 (脚径)	器高	上段:内面 下段:外面	外	内				
9	1	T1 SK160	d	甕	(15.4)		3.6	橙色 褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/6	1 2	口縁帯に7条の沈線文。外面に煤付着。	
9	2	T1 SK160	d	甕	(17.9)		4.9	にぶい黄褐色、灰黄褐色 にぶい橙色、灰黄褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/3	1 2	風化のため不明瞭であるが、口縁帯に多条平行沈線文。外面に煤付着。	
9	3	T1 SK160	d	甕	(19.2)		4.1	浅黄褐色 浅黄褐色	—	—	口縁~頸部 1/3	1 2	風化が激しく、調整不明。	
9	4	T1 SK160	d	蓋	2.9		3.3	浅黄褐色 にぶい黄褐色、褐色	ナデ、ミガキ	ナデ	把手部 上半	1 2	上下から穿孔される。	
9	5	T1 SK160	d	—		(4.2)	3.9	浅黄褐色 にぶい褐色、褐色	—	—	底部 1/4	1 2	風化が激しく、調整不明。	
9	6	T1 SK160	d	低脚 杯			4.0	3.9	浅黄褐色 浅黄褐色	ナデ	ナデ	脚部 完存	1 2	
9	7	T1 SK160	d	—			5.0	8.7	にぶい黄褐色、褐灰色 灰黄褐色、にぶい黄褐色	ハケメ、ナデ 指押さえ	ケズリ、 指押さえ	底部 完存	1 2	内外面に煤付着。
9	8	T1 SK160	d	—			6.3	10.5	灰黄褐色 にぶい褐色、にぶい黄褐色	ハケメ、ナデ 指押さえ	ケズリ、 指押さえ	底部 完存	1 2	外面に煤付着。
9	9	T1 SK160	d	甕	13.8	3.9	22.9		黒褐色、褐色 灰黄褐色	ハケメ、ナデ、 ミガキ	ナデ、ケズリ	ほぼ完形	1 2	内外面とも、黒斑あり。
9	10	T1 SK160	f	甕	(17.6)		3.2		橙色 褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/8	1 2	風化が激しいため、口縁帯の施文の有無は不明。外面に少量の煤が付着。
9	11	T1 SK160	f	甕	(18.0)		4.4		浅黄褐色、暗灰色 明黄褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/6	1 2	口縁帯に4条の沈線文。外面に煤付着。
9	12	T1 SK160	f	甕	(13.8)		3.9		褐色 褐色、灰黄褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/8	1 2	口縁帯に多条平行沈線文。内外面に煤付着。
9	13	T1 SK160	f	甕	(17.8)		4.1		浅黄褐色 浅黄褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/16	1 2	口縁帯に多条平行沈線文を施文後、ナデ消し。
9	14	T1 SK160	f	甕	(13.8)		3.9		明褐色、浅黄褐色 褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/4	1 2	
9	15	T1 SK160	f	—		(5.0)	5.0		にぶい黄褐色、黄灰色 にぶい褐色、明赤褐色	ハケのちミガ キ	ケズリ、 指押さえ	底部 1/3	1 2	外面に煤付着。
9	16	T1 SK160	f	—			4.8		褐色 褐色	ハケメ	ケズリ	把手部 破片	1 2	わずかに赤色顔料付着。
9	17	T1 SK160	g	甕	(13.2)		3.7		浅黄褐色、灰褐色 浅黄褐色、灰褐色	ナデ	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/6	1 2	口縁帯に3条の凹線文。外面に赤色顔料と煤付着。
9	18	T1 SK160	g	甕			1.7		にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	口縁~頸部 1/8	1 2	風化のため不明瞭だが、口縁帯に凹線文の痕跡をとどめる。口縁部を欠損。
9	19	T1 SK160	g	甕			7.4		浅黄褐色 浅黄褐色	—	ナデ、ケズリ	口縁~頸部 1/5	1 2	風化のため不明瞭だが、口縁帯に凹線文の痕跡をとどめる。外面の調整は、風化が激しいため、不明。口縁部を欠損。